

主 題：選ばれなかった選民

聖書箇所：ローマ人への手紙 11章1-6節

パウロはこのローマ人への手紙を通して「救いは罪人のいかなる行ないや努力によるのではなく、信仰のみによって与えられる。」と、そのことを1章から教え続けて来ています。彼は私たちがいかに罪深い存在であるかということをお教えた後、信仰による救いを教えて来ました。1章から3章の20節まで、神の前に私たちはどのような存在であるのか、神の目に私たちがどのように映っているのか、その罪深さをこれでもかというほど、彼は私たちに教えてくれました。どこを見てもどこを取っても、神に喜ばれるようなものは私たちの内に存在していません。まさに、イザヤが言ったように「汚れた衣のような存在」です。ただ捨てられて燃やされて滅ぼされて当然の存在、それが私たちだと言いました。その私たちの姿をお教えた後、ご存じのように、また、覚えておられるように、3章21節から5章まで、パウロは、しかし、そのような私たちを神が救ってくださること、その罪を赦して下さり、生まれ変わらせてくださるといふ救いは、信仰によってのみ与えられるということをお教えました。そして、6章から8章には、救われた者にふさわしい生き方について彼は私たちに教えています。

そして、私たちは9章からまた学び始めています。この神によって選ばれた民、イスラエルのことを。9-10章を見て行くとき、そこにはイスラエルの失敗が繰り返され教えられていました。彼らは神の備えられた救いを心から感謝して素直に受け入れることをしませんでした。こんなに素晴らしい救いがあるのに、そして、彼らは選ばれて特別な恵みがあったにも関わらず、彼らはその主を受け入れようとはしなかった。その原因までパウロは教えました。それは彼らのプライドでした。「私たちは神によって選ばれた選民だ。我々は神の律法を守り行なっている。」と、このような自負心がこの救いを彼らが受け入れなかった理由であると、そのようにパウロは私たちに教えてくれました。プライドというものは非常に恐ろしいものです。自分の本当の姿が見えていないことは悲しいことです。私たちはみな、自分は大丈夫だと思っていましたが、神のおことばによって実はそうでないということに気付かされました。私たちは自分の罪深さが分かり、そして、私たちは神の前に救いを求めて出ていったのです。私たちは神のあわれみを求めたのです。

パウロはこのローマ書10章21節で「またイスラエルについては、こう言っています。「不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。」と言っています。神がイスラエルに救いの御手を延ばしておられたと。しかし、悲しいことに、イスラエルがそれを拒み続けていたことがここに記されていました。それは昨日今日に始まったことではありません。このパウロの時代に始まったのではなく、それ以前から彼らは同じことを繰り返して来ました。時代を越えて彼らは神の救いの恵みを拒み続けて来たのです。何度も不従順と悔い改めを繰り返して来たのがイスラエルでした。皆さんもよくご存じの通りです。神のなさった素晴らしい驚きの奇蹟を目の当たりにし、神の臨在を目撃し、救い主の御顔を拝し、その教えを直接受けたにも関わらず、彼らはその主に逆らい、拒み続けたのです。

そのような現実を見たときに当然考えることは、「では、もうイスラエルに対しては希望がないのか？神の忍耐も限界に達して、もう彼らをお赦しにならないのではないのか？」と、パウロのことばを使うなら、「もう神はイスラエルを退けてしまわれたのではないのか？もうイスラエルは十分だ。ここまで救いの手を差し伸べているのに、悔い改めの機会を与えているのに、あなたがたはそれを拒み続けている、もう十分だ。」ということです。果たして、神はそのように言われているのでしょうか？パウロは11章1節で「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。」と、このように問いかけています。恐らく、そのように考える人たちがいたのでしょう。このイスラエルの人々の現実を見たときに、そのように思う人たちがいたとしても不思議ではありません。そこでパウロはこう言います。「絶対にそんなことはありません。」と彼は躊躇なくそのことを否定するのです。そして、ここで使われていることばはギリシャ語の中で最も強い否定を表わすことばです。「絶対にない。絶対にあり得ない。」と彼は否定するのです。

それはパウロには「神は彼らを退けられない。彼らは今も神の民である。」という、そういう確信があったからです。そして、パウロはこの1節から「確信の根拠」を述べて行きます。このように神に逆らうイスラエル、しかし、神はまだ彼らを忘れておられないと。その根拠をパウロは1節から6節に、三つ上げています。

★イスラエルは今も神の民であるというパウロの確信の根拠

A. 彼自身が救われたこと 1 節

もう一度 1 節をご覧ください。「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。」パウロははっきりとしたユダヤ人でした。そして、パウロはそのことを引き合いに出して、このユダヤ人である私が救われたという事実は、神がまだイスラエルを退けたのではないことの証拠だと言うのです。「もし、神がイスラエルに対してもう十分だと言われているなら、私が救われるはずがない。」と言うのです。神はまだイスラエルのことを覚えておられる、イスラエルを見捨てておられないと。パウロがここで「イスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。」と語っているのは、自分が正真正銘のユダヤ人、100%ユダヤ人であることを明らかにしたのです。後にユダヤ教徒になった異国人ではなかったのです。彼は生まれつき、イスラエル民族に属する者である、アブラハムの子孫であり、そして、ベニヤミン族の出身であると言います。12部族の中でも、このベニヤミン族とユダ族だけが神に対して忠実でした。他の部族がすべて神のみこころに反する選択をした時に、彼らだけは違ったのです。そのベニヤミン族の生まれであると言うのです。

このみことばを私たちが学んで行くに当たって、ぜひ、皆さんの頭に入れておいていただきたいことの一つは、この 1 節に「神はご自分の民を」とありますが、「ご自分の民」とはいったいだれを指しているのか？ということなのです。ある人々はこれは「救いに選ばれた人々」のことで、そこにはユダヤ人だけでなく私たち異邦人も含まれると考えます。でも、パウロがここで「ご自分の民」と言ったのは、これは「イスラエル民族」を指しているのです。彼は自分の民族、イスラエルのことを指して言っているのです。そのことはまたいろいろな箇所に出て来ます。

ですから、まず一つ目に、イスラエル民族がまだ見捨てられていないことの根拠としてパウロが上げたのは、「イスラエル人である私が救われた。」ということなのです。

B. 主の選民であること 2 a 節

このイスラエルが「主の選民である」ということです。パウロ自身が救われたことだけではないのです。イスラエルが主の選民であること、それがまだ神が彼らを見捨てておられない根拠だとパウロは言うのです。2 節を見ると「神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたではありません。」とあります。

1. 意味

(1) 予知＝神が選ばれた人に示す特別な愛のこと

「あらかじめ知っておられた」と聞くと、恐らく、皆さんはローマ 8 : 29 のみことばを思い出されることでしょう。そこで私たちは「予知」ということを学びました。「あらかじめ知っている、前もって知っている」という意味ですが、このことばは、決して、神はだれがご自分を信じるかを確認した後、その人を選ばれたのではないということを見て来ました。この「予知」というのは「神が選ばれた人へ示す特別な愛のことである」と学んだことを覚えていますか？「あらかじめ知っている」ということは、神が選ばれた人に示す特別な愛のことです。神がご自分が選ばれた人を特別に愛し、そして、その人々に契約の愛を示して行くと、そのような意味を持ったことばであることを私たちはもうすでに学んで来ました。ですから、神はイスラエルを選び、その人たちに特別な愛を示した、イスラエルはそのような存在だと言うのです。

(2) 前もってある地位や職務に任命する

「あらかじめ知っておられた」ということばについてももう一つ覚えたいことは、「前に、ある地位とかある職務に任命する」という意味もあるということです。神がイスラエルの民をある特別な職務、働きに任命されたのです。確かに、そのことも私たちはみことばを通して知っています。彼らは選ばれたのです。特別に選ばれたのだからです。そこには神のすばらしい目的が存在するのです。というのは、このイスラエルは他の民族から区別されました。だから、「選民」なのです。

2. 根拠

なぜ、神がイスラエルを他の民族と区別されたのでしょうか？その理由は、皆さんがよくご存じのように、このイスラエルが偉大なる主を人々に明らかにするためです。イスラエルがこの真の神がどんなに偉大な方であるのかを人々の前で明らかにするためです。エレミヤ書 13 : 11 にはこのように記されています。「なぜなら、帯が人の腰に結びつくように、わたしは、イスラエルの全家とユダの全家をわたしに結びつけた。——主の御告げ。——それは、彼らがわたしの民となり、名となり、榮譽となり、栄えとなるためだったのに、彼らがわたしに聞き従わなかったからだ。」、神がイスラエルを選ばれたのは、彼らが神ご自身の民となり、神ご自身の名となり、そして、神ご自身の名誉となり栄光となるためです。つまり、彼らを選ばれたのは、彼らを選ばれた神のすばらしさが彼らを通して明らかにされて行くためでした。その

ことを知っていたパウロはこのように言うのです。「神に特別に愛され、前もって神によってこの働きに任命されたイスラエルが、神に退けられる、見捨てられることは決してあり得ない。なぜなら、神がこのようなすばらしい目的をもって彼らを選んだのだから。」と。

また、今私たちが見ていることに関して、トーマス・シュレイナーという新約解釈の教授はこのように説明します。「文脈から見てこの『あらかじめ知っておられる』ということばは、『退ける』ということばの反意語として機能している。」と。2節に「あらかじめ知っておられた」とあり、その後「ご自分の民を退けてしまわれた」とあります。ですから、この二つは反意語であると言うのです。「退ける」ということの反対は「神は選ばれた」ということです。ですから、「あらかじめ知っておられた」ということは、神が特別に選んだ人たちを退けるはずはないということです。アモス書3：2でアモスはこのように言っています。「わたしは地上のすべての部族の中から、あなたがただけを選び出した。…」と、神がイスラエルを選ばれたことです。神はイスラエルを前もって選ばれました。神の民です。

ですから、神は確かにイスラエルを選ばれた、目的をもって彼らを選ばれたのです。その事実がパウロの根拠だったのです。神は目的をもって彼らを選んだ以上、その目的が達成されるまで彼らを見捨てることは絶対にあり得ないのです。ですから、確かに今、イスラエルは神に逆らっています。しかし、神は彼らを退けておられないのです。詩篇94：14「まことに、主は、ご自分の民を見放さず、ご自分のものである民を、お見捨てになりません。」と、また、1サムエル12：22でも「まことに主は、ご自分の偉大な御名のために、ご自分の民を捨て去らない。主はあえて、あなたがたをご自分の民とされるからだ。」とあります。ですから、みことばを見ると、確かに、神はご自分が選ばれた民を見捨てることはないと言っています。しかし、なぜ、神は — 10章21節のみことばを思い出してください。「またイスラエルについては、こう言っています。「不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。」—、「不従順で反抗する民に対して」なおも手を差し伸べ続けられるのでしょうか？なぜ、彼らに対して「もう十分だ。」と言われないのでしょうか？

それは、この神のご性質にあるのです。神は契約を守られる神だからです。ネヘミヤ書9章で、神はそのことを言われています。このイスラエルの民がどのように神の前に礼拝をささげていたのか、その様子が9章の初めに記されていますが、6-32節を見て行きましょう。「ただ、あなただけが主です。あなたは天と、天の天と、その万象、地とその上のすべてのもの、海とその中のすべてのものを造り、そのすべてを生かしておられます。そして、天の軍勢はあなたを伏し拝んでおります。：7 あなたこそ神である主です。あなたはアブラムを選んでカルデア人のウルから連れ出し、彼にアブラムという名を与えられました。：8 あなたは、彼の心が御前に真実であるのを見て、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、エブス人、ギルガシ人の地を、彼と彼の子孫に与えるとの契約を彼と結び、あなたの約束を果たされました。あなたは正しい方からです。：9 あなたはエジプトで私たちの先祖が受けた悩みを見、また、葦の海のほとりでの彼らの叫びを聞かれました。：10 あなたは、パロとそのすべての家臣、その国のすべての民に対して、しるしと不思議を行なわれました。これは、彼らが私たちの先祖に対して、かつてなことをしていたのをあなたが知られたからです。こうして、今日あるとおり、あなたは名をあげられました。：11 あなたが彼らの前で海を分けたので、彼らは海の中のかわいた地を通って行きました。しかし、あなたは、奔流に石を投げ込むように、彼らの追っ手を海の深みに投げ込まれました。：12 屋間は雲の柱によって彼らを導き、夜は火の柱によって彼らにその行くべき道を照らされました。：13 あなたはシナイ山の上を下り、天から彼らと語り、正しい定めと、まことの律法、良きおきてと命令を彼らにお与えになりました。：14 あなたの聖なる安息を彼らに教え、あなたのしもべモーセを通して、命令とおきてと律法を彼らに命じられました。：15 彼らが飢えたときには、天からパンを彼らに与え、彼らが渴いたときには、岩から水を出し、こうして、彼らに与えると誓われたその地を所有するために進んで行くよう彼らに命じられました。」、神のなさったことがすべてこのように記されています。そして、ご存じのように16節から見て行くと、イスラエルの罪が出て来ます。「：16 しかし、彼ら、すなわち私たちの先祖は、かつてにふるまい、うなじをこわくし、あなたの命令に聞き従いませんでした。：17 彼らは聞き従うことを拒み、あなたが彼らの間で行なわれた奇しいみわざを記憶もせず、かえってうなじをこわくし、ひとりのかしらを立ててエジプトでの奴隷の身に戻ろうとしました。それにもかかわらず、あなたは赦しの神であり、情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かであられるので、彼らをお捨てになりませんでした。：18 彼らが自分たちのために、一つの鑄物の子牛を造り、『これがあなたをエジプトから導き上ったあなたの神だ。』と言って、ひどい侮辱を加えたときでさえ、：19 あなたは、大きなあわれみをかけ、彼らを荒野に見捨てられませんでした。屋間は雲の柱が彼らから離れないで、道中、彼らを導き、夜には火の柱が彼らの行くべき道を照らしました。：20 あなたは、彼らに悟らせようと、あなたのいつくしみ深い霊を賜わり、彼らの口からあなたのマナを絶やさず、彼らが渴いたときには、彼らに水を与えられました。：21 四十年の間、あなたは彼らを荒野で養われたので、彼らは何も不足することなく、彼らの着物もすり切れず、足もはれませんでした。：22 あなたは彼らに王国や国々の民を与え、それらを領地として割り当てられました。こうして、彼らはシホンの地、すなわちヘシュボンの王の地と、バシャンの王オグの地を占領しました。：23 あなたは彼らの子孫を空の星のようにふやし、彼らの先祖た

ちに、は行って行って所有せよ、と言われた地に、彼らを導き入れられました。:24 こうして、その子孫は、は行って行って、その地を所有しました。あなたは、彼らの前でこの地の住民、カナン人を屈服させ、これを彼らの手に渡し、その王たちや、この地の人々も渡して、これを思いどおりに扱うようにされました。:25 こうして、彼らは城壁のある町々と、肥えた土地を攻め取り、あらゆる良い物の満ちた家、掘り井戸、ぶどう畑、オリーブ畑、および果樹をたくさん手に入れました。それで、彼らは食べて、満腹し、肥え太って、あなたの大いなる恵みを楽しみました。:26 しかし、彼らは反抗的で、あなたに反逆し、あなたの律法をうしろに投げ捨て、あなたに立ち返らせようとして彼らを戒めたあなたの預言者たちを殺し、ひどい侮辱を加えました。:27 そこで、あなたは彼らを敵の手に渡され、敵が彼らを苦しめました。彼らとその苦難の時にあなたに叫び求めると、あなたは天からこれを聞き入れ、あなたの大いなるあわれみによって、彼らに救う者たちを与え、彼らを敵の手から救ってくださいました。:28 しかし、ひと息つくくと、彼らはまた、あなたの前に悪事を行ないました。そこで、あなたは彼らを敵の手にゆだねられ、敵が彼らを支配しました。しかし、彼らが立ち返って、あなたに叫び求めると、あなたは天からこれを聞き入れ、あなたのあわれみによって、たびたび彼らを救い出されました。:29 あなたは彼らを戒めて、彼らをあなたの律法に立ち返らせようと言われましたが、彼らはかつてなふるまいをして、あなたの命令に聞き従わず、もし人がこれを行なうなら、これによって生きる、というあなたの定めにもむいて罪を犯し、肩を怒らして、うなじをこわくし、聞き入れようとはしませんでした。:30 それでも、あなたは何年も彼らを忍び、あなたの預言者たちを通して、あなたの霊によって彼らを戒められましたが、彼らは耳を傾けませんでした。それであなたは、彼らを国々の民の手に渡されました。:31 しかし、…」と、イスラエルの歴史をよくご存じの皆さん、このようにして、神はあわれみをもって彼らに手を差し伸べ続けました。しかし、イスラエルは悲しいことに、この神に逆らい続けるのです。でも、彼らが罪を悔い改めたら、神はまた、あわれみを示されるのです。31-32a節をご覧ください。「あなたは大いなるあわれみをかけて、彼らを滅ぼし尽くさず、彼らを捨てられませんでした。あなたは、情け深く、あわれみ深い神でありますから。:32 私たちの神、契約と恵みを守られる、大いなる、力強い、恐るべき神よ。…」、これがイスラエルの神です。これが私たちの神です。

すなわち、私たちの主は必ず約束を守られるお方です。神が言われたことを守らないとするなら、それは神ではありません。今、私たちが見て来たように、この罪に罪を重ねるイスラエルに対しても、神は彼らを愛すると誓われました。神は彼らを選ばれたのです。そして、神はその愛を示し続けられました。約束を撤回したり、約束を訂正したりするようなら、それは神ではありません。この聖書が私たちに教えてくれる、すべてをお造りになった創造主なる真の神は、言われたことを必ず守られるお方です。だから、パウロは言うのです。「神はまだ彼らを退けておられない。」と。

確かに、この11章を見て行くと、神のすばらしい約束がイスラエルに与えられています。今、こんな世の中になって大変な中近東の様子を見ると、イスラエルの周りにはイスラエルを敵視する国々ばかりです。しかし、私たちが分かっていることは、神はこのイスラエルを守ってくださること、イスラエルに対する計画があるということです。

ダラス神学校で長年教鞭を執っておられたS・ルイス・ジョンソン博士は、昔の逸話としてその正確なところは良く覚えていないけれども、しかし、何度も私はその話を聞いたとしてある一人の人のことを上げました。それはプロシアの王、フレデリック二世に関する逸話だっと思うとして、このような話をしました。プロシアとは旧ドイツ連邦のことですが、その王と、そして、彼のチャプレンが聖書のことを熱心に話し合っていたときに、最後に、王がチャプレンにこのように言います。「聖書が靈感を受けた神のことばであることの証拠をひと言であげろ。」と。すると、このチャプレンはこのように言いました。「あなたが要求なさったようにそれをひと言で言うことができます。それはユダヤ人です。ユダヤ人の歴史を見たときに、それが記されている聖書を見たときに、その通りにすべてのことが進んでいます。そして、その通りにこれからも進んでいきます。」と。

神はすばらしい計画をあのおイスラエルに対してもっておられます。11章の25、26節に「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、:26 こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれているとおりに。「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。」と記されています。いったい、これはいつのことでしょうか？皆さん、それは楽しみにしておいてください。すばらしい約束が神によって為されているのです。

ですから、パウロの確信は「私たちの神はこのように約束を守られる、契約を守られる神である。言われたことを必ず守られるお方だ。それゆえに、このお方に選ばれたイスラエルの民が見捨てられることはあり得ない。なぜなら、神は彼らに対してまだすばらしい計画を備えておられるから。」であり、これがパウロ自身の確信の一つだったのです。

この11章2節をもう一度見ましょう。「神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を」このように特

別に愛し、神がその目的をもって選ばれた民を「退けてしまわれたのではありません。」と言い、その後、「それともあなたがたは、聖書がエリヤに関する個所で言っていることを、知らないのですか。」とあります。面白いでしょう？パウロが自分の確信の根拠として上げたのは「聖書」でした。パウロが神の約束を強く信じていたこと、それが彼の確信であったことは、この2節の後半が明らかにしています。これが真実である、これは間違いのない事実だと確信をもって述べたその根拠は、彼の経験ではなく、人から聞いた話でもなかったのです。彼が言ったのは「聖書がエリヤに関する個所で言っていること」と、つまり、彼はみことばの上に強く立っていた人物なのです。パウロはエリヤのことを「聖書」から語ります。それはパウロが聖書を信頼し、確信を置いていた証拠です。

◎みことばに立つこと

皆さん、私たちは今、このことをしっかりと学ばなければいけません。私たちの信仰はこの神のみことばの上に、約束の上にしっかりと立たないといけません。そうでなければ、私たちの信仰は必ずぐらつきます。なぜなら、ぐらつかせるものが私たちの周りに溢れているからです。毎日そのようなものが私たちの人生に襲って来ます。予期せぬことが一杯あります。悲しむべきことが一杯あります。辛いことが山ほどあります。心を悩ますことが一杯あります。心を恐れさせることが山ほどあります。そのような中で私たちが信仰者としてしっかりと生きて行くために必要なことは、パウロがそうであったように、神のおことばにしっかりと根を下ろすことです。神のおっしゃったことを心から受け入れ、その約束に立つことです。なぜなら、神の約束は必ず成るからです。神が言われたことは必ず実現するからです。

ローマ書9章の初めのところを思い出すと、パウロは非常な悲しみをもっていました。というのは、自分の同胞であるイスラエル民族が救いに与っていないからです。彼らが神に逆らっている現状を見たときに、心が荒み、心が痛みました。私たちも愛する者たちに一所懸命伝道してもなかなか結果が出て来ないとき、もう無理ではないか…と心が痛みます。なぜなら、私たちの愛する者たちがこの神に逆らい続け、滅びに向かっているのを知っていながら何も感じないとしたらおかしいからです。もし、永遠の地獄がなければ、イエス・キリストはこの世に来る必要はなかったのです。皆さん、死んで終わってしまうのならイエスが来る必要はないのです。なぜ、イエスは十字架にかかって死なれたのでしょうか？さばきがあるからです。そのさばきから、その地獄から私たちを救うためにイエスは来てくださったのです。ということは、この救いを受け入れていない人たちは、残念ながら、間違いなく、確実に、永遠の地獄に向かっているという現実を私たちは覚えなければいけません。パウロはそのことを知っていたから、一人でも多くの者たちがこの救いに与って欲しいと願ったのです。そして、そのために彼はみことばを語り続け、福音を語り続けたのです。でも、結果として、願っているような結果が出て来ないのがっかりします。しかし、パウロがすごかったのは、そのような中でも、思い通りに物事が進んでいない中でも神の約束に立ったことです。それが彼の確信だったのです。神のおことば、それが私の信仰であり、それが私の確信だと言うのです。

もし、皆さんの中で自分の救いがどうか分からないという人がいるなら、聖書に戻らなければいけません。聖書の約束に立つのです。どのようにすればこの救いに与るのか、そのみことばにしっかりと立って、このみことばが約束しているから私は救われているのだと確信をもつのです。だれかがそのように言ってくれたとか、手帳に何時イエスを信じたと書いてあるからとか、祈ったからとか、そのようなものに立つのではありません。神の約束に立つのです。なぜなら、救いは神がくださるものだからです。「神が言われた、だから、私は信じる」と。ですから、自分の救いに不安があるなら、人に相談する前に神のおことばを見て、神が言われていること、「このようにすれば救われる」というそのみことばをしっかりと覚えて、それをどこかに書くなりして、この約束が私に与えられている、そのことを確信して生きることです。

今はこんな時代です。将来のことがいろいろと不安視される時代です。でも、皆さんご存じのように、主は私たちの必要を満たしてくださるのでしょう？今、あなたに必要なことは、信仰者であるあなたに大切なこと、必要なことは、どんな時代であっても、どんなにあなたの会社の経営状態が悪くても、好景気であろうとそうでなくても、どんな状況にあっても、神があなたに望んでおられることはただ一つ、あなた自身が与えられていることに対して忠実であることです。与えられていることに熱心に、主の栄光のためにそれを為すことです。それが神が私たちに望んでおられることです。もし、皆さんが社会人なら、あなたはその職場において一番信頼される社員になることです。あなたのことばには偽りがいいからです。あなたのしていることに何の偽りもないからです。あなたは何かをごまかしてはいない、会社のものをくすねてもいない、与えられた時間を一生懸命主のために生きています。職場の人は、間違った方向にあなたを誘惑しようとするかもしれませんが、あなたは主を恐れる者として、主が置いてく

ださったその職場にあって一生懸命、主の栄光のために最善を尽くして、主が喜んでくださることを願いながらベストを尽くして行くのです。職場において一番信頼出来る人、そのような人になることです。あなたの首を切ることが出来る人を恐れて生きるのではなくて、あなたの歩みに清算をされる人を畏れて生きることです。

主婦であるあなたは、神が喜んでくださる主婦になることです。すべてのことを一生懸命主のためにすることです。あなたが学生なら、主に喜ばれる学生になることです。主があなたに与えてくださっていることに対して、すべてにおいて熱心であることです。私たちが神の前に与えられている責任は、明日のことを恐れることではありません。自分の仕事はどうなってしまうのだろうと、そのようなことではないのです。私たちが恐れなければいけないのは、神を悲しませるようなことをしていないかどうかです。今日という日を神が託してくださった、その一日を神の栄光のために精一杯生きているかどうかです。神の助けをいただきながら。それがあなたが考えなければいけないことであり、それがあなたが心配しなければいけないことです。後のことは神に任せておくのです。結果的に、あなたが職を失うことがあっても、神は必ずあなたの必要を満たしてくださる。そのようにして私たちは生きるのです。なぜ、そのように生きるのですか？それは聖書がそのように教えているからです。

パウロという人物を見たときに、彼は神のおことばにしっかり立って生きようと思いました。そして、そのように生きていたのです。彼の確信は「神のおことば」でした。私たちも同じ確信を持って生きるべきです。「神がこのように言われている。私は信じる。」と。私たちはこの神が教えてくださっていること、このみことばの上にしっかりと立って生きて行くことです。パウロはローマ書15章の中でこのように言っています。15：4「昔書かれたものは、すべて私たちを教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。」と。はっきりと書かれています。なぜ、神がこうして私たちに聖書をくださったのか？あなたを教えるためです。あなたを励ますためです。私たちの先人であるリーダーたち、信仰者たちがどのように生きたのか、それを見たときに、彼らは間違いなく神を信じて神に信頼を置いて生きたのです。彼らはたくましい信仰者でした。彼らは主を心から崇める者たちです。

エリサベツがマリヤを訪問したときに、彼女はこのように言ってマリヤを称えます。ルカ1：45「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」、マリヤはそのような人物だったのです。神が言われたことは絶対にそのようになると信じきっていたのです。自分に子どもが生まれるということ、それは人間的には不可能なことでした。しかし、神がそのように言われたなら必ず行なわれるのです。「その通りになる」という信仰です。そのような信仰を神は祝されました。みな共通しています。神に喜ばれた人たちに共通していることは、神が言われたことを信じ、そして、神を恐れて神を愛して生きたことです。あなたはそのような歩みをしておられるかどうかです。どんな時にでも神を信じて、神を信頼して歩んでいるかどうか？皆さん、ここまで見て考えなければ、私たちの周りに起こっている様々なことによって、あなたの心は不安に陥ります。その不安に潰されてしまいます。

今、私たちが見たローマ書15：4のみことばは「希望を持たせるためなのです。」。私たちはどんな時にも希望を持って生きることが出来るのです。会社が倒産するかもしれないという報告を聞いて喜ぶ人はいないでしょう。不安を覚えることがあるでしょう。しかし、私たち信仰者は、その背後におられる神を見て、どんな状況でも神が望んでいることは変わらないということを感じる時に、「神さま、私は何があってもあなたを信頼します。明日もう会社はないかもしれないけれど、今日という日が与えられ、今日またここに遣わされている以上、私はこの場において最善を尽くします。あなたの栄光を現わすために。」と、そのような生き方をしている人たちは当然、その先のことに対して希望を持つのです。神がどのように導いてくれるのか？と…。それが信仰者ではないのですか。希望を持っているのです。それはケセラセラのスピリットではないのです。何とかなる、ではないのです。神が約束されたことは必ずそうなるという信仰です。その信仰が私たちに希望をくれるのです。その信仰が私たちに大きな期待をもたらすのです。どのように神が導いて行ってくれるのかと。

希望を失っていませんか？皆さん、今あなたに直面する大きな問題に、様々な悩みであなたの心は荒んでいませんか？神のおことばに立つのです。神が望んでおられることを、神の助けをいただきながら、あなたは実践して行くのです。そうすることによって、神があなたを通して働きを為されます。

19世紀にR.Kelso Carterという人がある曲を書きました。この人は大学で化学や自然科学、そして、美術を教えていた大学の教授でした。その人が主の導きによって、神学校に行って牧師となります。もちろん、その後には彼は医者となって過ごす訳ですが、この人物が書いた讚美歌が日本語にもなっています。聖歌456に「さかえの王にます主の」という曲があります。日本語ではこのように訳されて

います。「世は変わるとも、変わらぬみことばに堅く立ちて、惑い、恐れの高みに、心は乱されじ、立て、立て、永久（とわ）に変わらぬみことばを、信じ、立て、神のみことばに立て」。彼が書いた詩を直接訳すところになります。「果たされる約束に立つ、疑いと恐れの大きな高みに悩まされるとき、生きている神のみことばによって私は勝利する、神の約束に立つ、」、コーラスはこのように続きます。「立て、立て、私の救い主なる神の約束に立て、立て、立て、私は神の約束に立っている。」と、最後はそうのように終わります。勧めているわけではありません。「私は神の約束に立っている」と、そこなのです、皆さん。神の約束を信じたら良い、神の約束は信頼に値すると、みな知っています。問題は約束に立って生きるかどうかです。

あなたはどのように生きていますか？こんな時代だからこそ、私たちはもっとこのことを学ぶべきでしょう。神の約束に立つのです。その生き方こそ、神の栄光を現わします。なぜなら、あなたがこのような世の中の、問題の多い、悩まされることの多い世の中にあって、希望を持って生きているということは、その希望を与えてくださった神のすばらしさが、あなたを通して周りの人たちに証されて行くからです。だから、信仰者の皆さん、どうぞ、パウロがしたように、みことばに立つ者となってください。みことばに立って、みことばにあって歩み続ける者になってください。

《考えましょう》

1. 聖書に立つことがどうして信仰者には重要なのでしょうか？
2. 今日の学びで教えられた神はどのようなお方でしたか？
どうして我々は、神にではなく、すぐに自分や人に頼ってしまうのでしょうか？
3. あなたは今日からどのように歩んで行こうと決心なさいましたか？